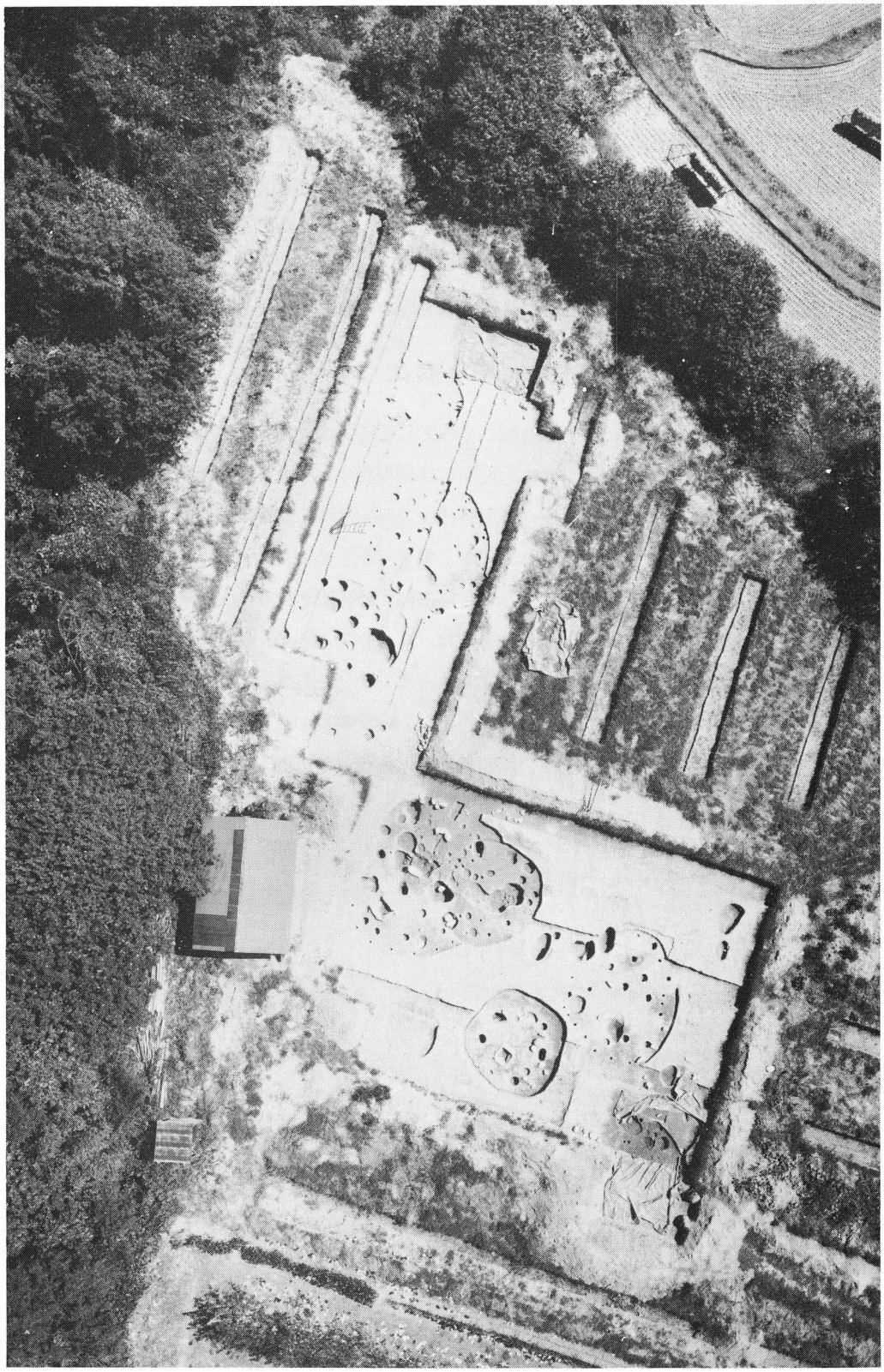
山梨県北巨摩郡白州町

根古屋遺跡

―― 団体営圃場整備事業に伴う発掘調査概報 ――

1985

白州町教育委員会



遺跡航空写真

― ついにあらわれた4500年前の家のあと ―

根古屋(ねごや)遺跡からは、およそ4500年前の家のあとが10軒以上みつかりました。今、私たちが暮らしている地面より50 cmぐらい下から縄文時代の家がみつかったのです。つまり縄文時代の人たちが暮らしていた地面も50 cm下にあったわけですね。では、どうして埋まってしまったのでしょうか。２つぐらい理由が考えられます。１つには、昔まだ活動を続けていた八ケ岳火山の爆発が原因で、降ってきた火山灰がつもったり、もう１つには、台風や大雨で土砂崩れや川のはん乱がおこって縄文時代の人たちの生活の場を埋めてしまったということが考えられます。

― 縄文時代の家について ―

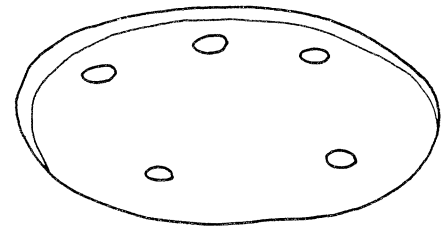
では、少し縄文時代の家について勉強してみましょう。縄文時代の家は、今、私たちが住んでいる家とは違い、地面を堀りくぼめ、地上には屋根だけがみえるという家でした。これが竪(たて)穴式住居(あなしきじゅうきょ)というもので、縄文時代から歴史時代までみられます。竪穴式住居の特徴として、夏は涼しく、冬は暖かいことがあげられますが、ちょっとしめっぽいのが欠点です。穴は、円形や隅(すみ)の丸い長方形などに掘られますが、根古屋遺跡では円形の家がたくさんみつかりました。屋根を作るには柱を立てなければなりませんね。柱を立てるための穴を掘り、その穴に柱になる木を埋めこみます。その数はだいたい４本～５本です。そして、家のやや奥まった所に土を掘りくぼめていろり（炉(ろ)）を作ります。いろりは、縄文時代の人たちにとってはとても大切なもので、今のガスコンロやストーブ、照明器具などの役目をはたしていました。また、家の中

根古屋の村（想像図）

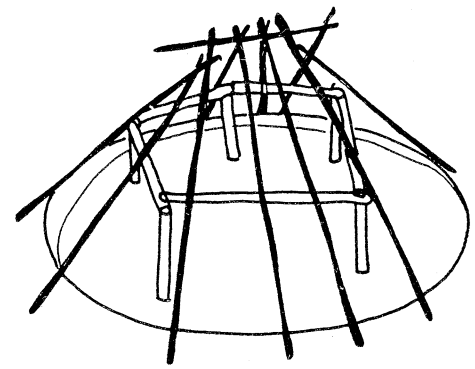
に石で組んだ祭壇(さいだん)を作る家もあり、それは一部の家でしかみられない特別なものです。

みなさんの家は、台所や居間、勉強部屋、寝室といった部屋がきちんとわかれていますね。しかし縄文時代では、一つのまるい穴の中で、食事を作り食べ、寝たりしていたのです。おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさんなどといっしょに暮らしていたのでしょう。夜、いろりをかこんで、おとうさんはあしたの狩りの順備をし、おかあさんは今日とってきた木の実を石皿(いしざら)と磨石(すりいし)という石の道具を使ってすりつぶし、あしたの食事の順備などをしていたのでしょうか。遺跡からは、こうした縄文時代の人たちの生活道具にかぎらず、あらゆる時代の人たちの使っていた生活用品がみつかるのです。

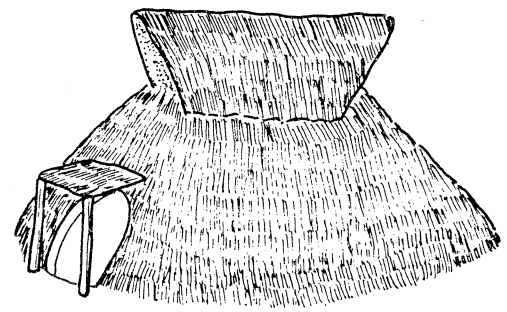
ちょっと話がそれてしまいましたが、遺跡でみる家のあとはただの穴ポコだけで、いったいどんな家が建っていたんだろうと疑問に思った人がたくさんいると思います。長野県富士見町井戸尻(いどじり)遺跡や茅野市与助尾根(よすけおね)遺跡では、根古屋遺跡と同じ時代の家のあとが復元してあります。弥生時代の家のあとを復元している静岡県登呂(とろ)遺跡もあります。時代によって屋根の形など多少違いがみられますが、全体としてはたいした違いはみられません。



1. 穴を掘る



2. 柱を立てる



3. できあがり

竪穴式住居の構造

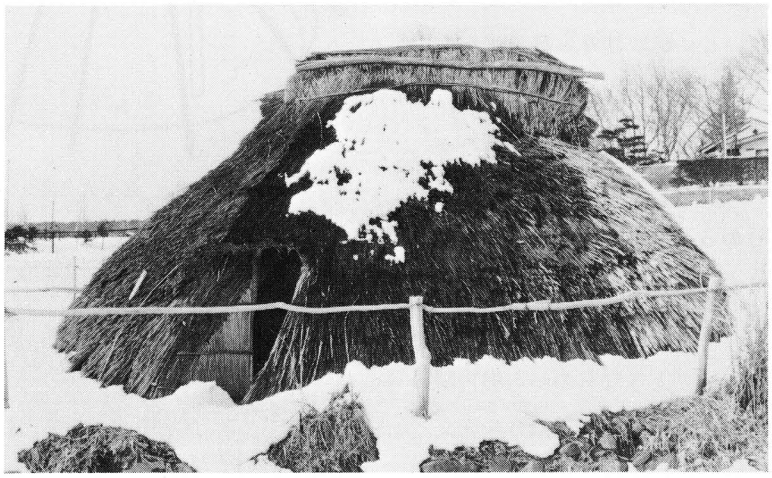
― 根古屋遺跡の問題点 ―

根古屋遺跡からみつかったものは家のあとばかりではなく、お墓のあともたくさんみつかりました。そしてたくさんの土器のかけらや石器もです。このようなものから根古屋に住んでいた私たち祖先の暮らしぶりを考えていくのです。縄文時代には、もちろん文字などはありませんし、どんな言葉をはなしていたかもわかっていません。そのために「これが祖先たちの本当の暮らしぶりなんだ」という答えは、1＋1＝2であるという答えをだすようにはいかないのです。

１つ１つの遺跡からみつかる家のあと、お墓のあと、土器のかけらや石器などの生活用品を根気よく研究していく中から、縄文時代に生きた私たちの祖先の暮らしぶりがわかり、それをより身近に感じることができるのです。それをみなさんとともに勉強し考えていきたいのです。

―参考資料―

茅野市与助尾根遺跡復元住居（協力　尖石考古館）



富士見町井戸尻遺跡復元住居（協力　井戸尻考古館）

序　　文

南アルプスの駒ケ岳を主峰とする駒ケ岳山塊の麓に展開する白州町は、白砂青松の自然の豊かな町である。

昭和59年度、古くから農業を主軸として続いてきた白州町が、その基盤となる水田の圃場整備事業に、台ケ原根古屋地区を対象として実施することに決定した。それに基づいて埋蔵文化財の発掘調査を実施したところ、縄文時代中期の住居址とそれに伴う遺物が発見されたのである。兼てから遺跡の存在は推定されていたのであるが、これによって事実として出現したのである。しかも、第1号住居址では、縄文時代の人々の精神文化の一端を知ることのできる遺物も出土していることから、貴重な文化遺産と考えなければならない。

町内には縄文時代中期の遺跡だけでなく、縄文時代全般から弥生時代、歴史時代等の各時代まで多くの遺跡が存在するであろうことは、各地から出土する土器などから十分窮うことができる。その事実は、白州町の歴史を解明するとともに、北巨摩地方の歴史、山梨の歴史を知る上にも重要な意味をもつものである。特に縄文時代をはじめとして平安時代、中世の集落址・城館跡の存在する可能性もあって、今後の調査が期待される。

今回の調査は、白州町において初めて発掘された文化遺産であって、白州町の歴史の上に大きな資料となるものである。発掘で得られた貴重な資料は、資料館に展示して考古学資料として長く活用するように努めたい。

この事業にご協力いただきました山梨県教育委員会文化課、山梨県埋蔵文化財センター等関係各位に深く感謝申し上げるとともに、小尾台ケ原区長を中心にご助力いただいた方々に深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和60年3月

白州町教育委員会教育長

高　野　富　徳

例　　言

1. 本書は、白州町台ケ原地区団体営圃場整備事業に伴う、根古屋遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、白州町教育委員会が主体となり、昭和59年６月１日より同年10月15日まで行なった。
3. 本書の作成に際し、図面整理、遺物の実測、トレース、写真撮影、執筆及び編集は、平野　修が行なった。
4. 整理の都合上、第８号住居址は欠番とした。
5. 石器の石質判別は、井戸尻考古館の武藤雄六・小林公明・樋口誠司の各諸氏に御教示を賜った。記して感謝する次第である。
6. 発掘調査及び概報作成にあたり次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った、記して感謝する次第である。（順不同、敬称略）

   新津　健・米田明訓（県埋蔵文化財センター）、山路恭之助・深沢裕三（須玉町教育委員会）、佐野勝広（小淵沢町教育委員会）、雨宮正樹（高根町教育委員会）、岡本範之（長坂町教育委員会）、櫛原功一（大泉村教育委員会）、峡北土地改良事務所、県文化課、県埋蔵文化財センター、県考古博物館、富士見町井戸尻考古館、茅野市尖石考古館
7. 本調査の出土遺物・諸記録は、白州町教育委員会が保管している。
8. 発掘調査組織

   調査主体　白州町教育委員会教育長　宮沢保吉（昭和59年９月30日退職）
   高野富徳（昭和59年10月５日就任）

   調査担当　白州町教育委員会埋蔵文化財担当　平野　修

   調査事務局　教育課長代理　原　誠
   学校教育係長　山田法規
   社会教育係主事補　宮川雅人
   総務係　伊藤早苗
9. 発掘調査及び遺物整理参加者（順不同）

   宮内淳（日本大学）、鹿嶋玲子、鈴木京子、鈴木はるじ、鈴木千代子、鈴木小苗、知見寺武義、知見寺美代子、高見沢マサ子、細田徳子、細田キクエ、細田逸子、細田洋子、氏原みねよ、清水幸子、小池佐津枝、小池孝子、山寺あやめ、中村そのえ、関口もも代、細田町子、細田みき江、細田マツノ、細田美悠紀、小池鈴子、小池恒子、小尾つる代、小尾祥子、名取佐紀子、名取しずゑ、名取清子、大輪あさみ、跡部ひろみ

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 4

Ⅱ　遺跡の位置・歴史的環境 …… 4

Ⅲ　発掘調査の概要 …… 6

Ⅳ　縄文時代の遺構 …… 8

a　竪穴式住居址 …… 8

b　土　　壙 …… 14

Ⅴ　縄文時代の遺物 …… 15

a　土　　器 …… 15

b　石　　器 …… 20

Ⅵ　ま　と　め …… 21

I　調査に至る経緯

白州町では、農村振興政策の一貫として農業基盤整備、すなわち圃場整備事業を昭和58年度から実施している。

白州町台ケ原地区団体営圃場整備事業は、昭和58年度から始まり、総事業計画 24000㎡を対象としている。そのような状況下、昭和59年度の対象地域には、昭和58年３月における山梨県考古学協会によって実施された遺跡分布調査の際確認されている「根古屋遺跡」が存在しており、県文化課、峡北土地改良事務所、白州町教育委員会の三者で協議を行った結果、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、昭和58年12月19～20日にかけて、県埋蔵文化財センター米田明訓文化財主事が実施した。その結果、対象地域の一部地域において、多量の縄文時代中期の土器片等が出土し、本調査を実施する必要があるとの報告を得た。早急に県文化課、峡北土地改良事務所、白州町教育委員会の三者で再度協議を行った結果、約3000㎡の地域を対象とし、本調査を実施することになり、記録保存を目的とする発掘調査を実施する運びとなった。

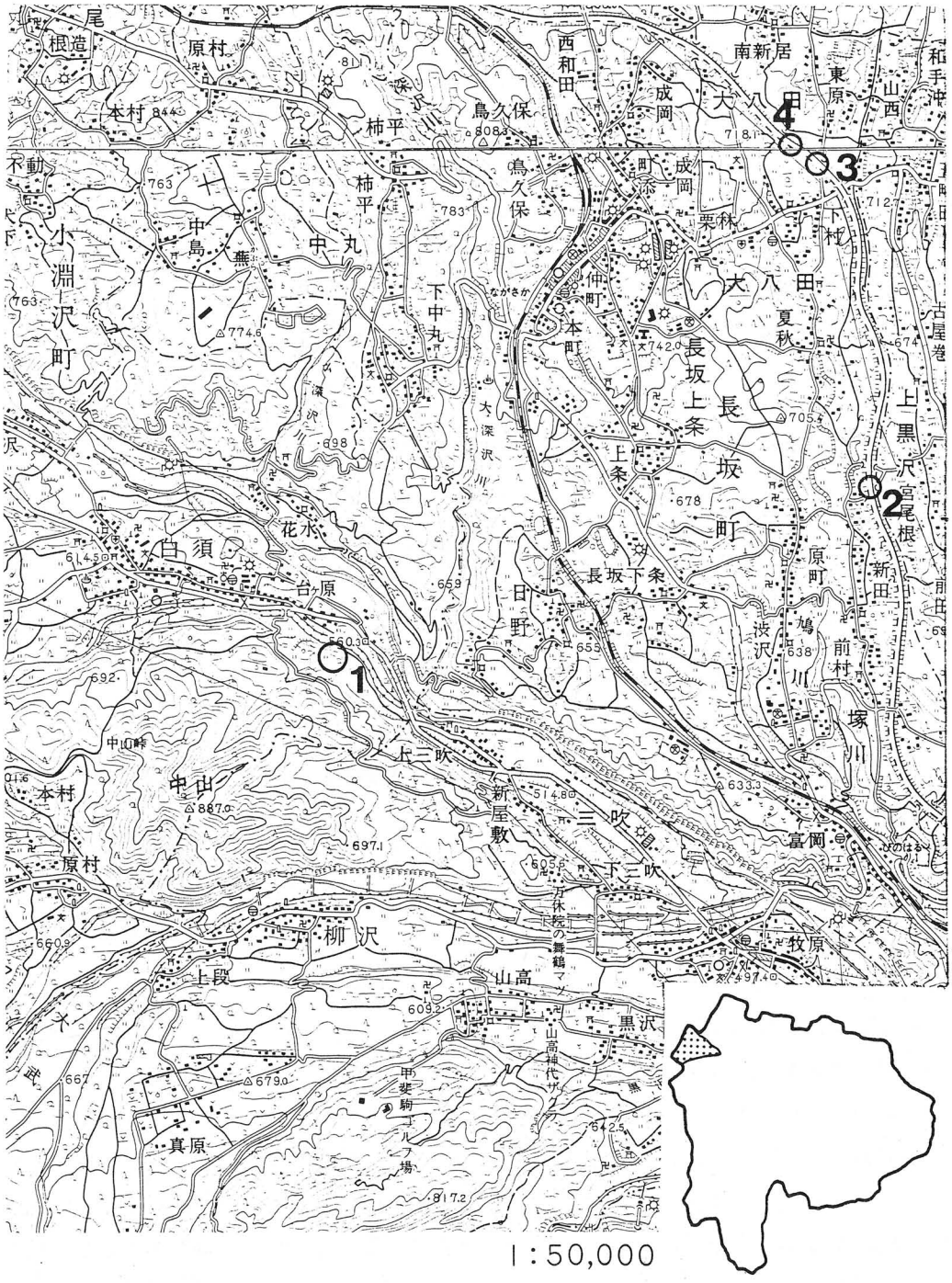
本調査は、事業主体者である峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、県文化課より補助金を得て、白州町教育委員会が調査主体者となり、昭和59年６月１日より同年10月15日まで実施された。

II　遺跡の位置・歴史的環境

白州町は、山梨県西北部の長野県境にあり、東には、八ケ岳火山の大噴火の際、流出した火山泥流が何万年にも及ぶ釜無川と塩川により侵食され形成された比高約100ｍを測る「七里ケ岩」とよばれる急崖がそびえ立ち、西には、甲斐駒ケ岳を主峰とする南アルプスの山脈が急峻な地形でせまっている。白州町は、所謂フオッサマグナ（大凹地帯）の西縁にあたり、糸魚川・静岡地質構造線が町内を縦走している。そのために、フオッサマグナの一部である甲府盆地の西端を形成する特徴的な地形となっている。

根古屋遺跡は、白州町の南東部、釜無川の支流である尾白川の右岸、標高約580ｍ前後を測る河岸段丘上に立地している。行政区画では、山梨県北巨摩郡白州町台ケ原字根古屋1625他に属している。遺跡の北には、現在の国道20号線（信州往還）が町内を縦走し、南には、中山がそびえ立っている。この中山の山頂には、中世の山城である「中山砦」があり(註１)、その眺望の良さから中世・近世（戦国時代）にわたり甲斐・信濃ルートの要衝を占める重要なポイントであったといえよう。

昭和58年の山梨県考古学協会により実施された白州町遺跡分布調査結果によると、縄文時代～中世にわたる遺跡が46ケ所存在するという。この結果より縄文時代中期後葉の曽利式期の遺物を伴う遺跡をピックアップしてみる。花水の押野、白須の大久保・桜井・竹宇、鳥原の上



1　根古屋遺跡

2　頭無遺跡

3　柳坪遺跡A区

4　柳坪遺跡B区

第1図　遺跡の位置

小用・東原・南沢、下教来石の道明等の遺跡が挙げられる。これらの遺跡は、いずれも釜無川右岸の広大な台地上や河岸段丘上に立地しており、根古屋遺跡もこうした遺跡の１つである。釜無川左岸の七里ケ岩台地上においては、該期に属する遺跡は確認されていない。

北巨摩郡下で該期の代表的な遺跡として、長坂町柳坪遺跡A地区・B地区、同町頭無遺跡を(註２)挙げることができよう。両遺跡ともに曽利式期の集落址の一部を調査したものである。長坂町は、白州町の東に隣接する町で、釜無川左岸の八ケ岳南麓地域にある。同じく北東部に隣接する小淵沢町では、中原遺跡があり(註３)、柳坪・頭無両遺跡同様、曽利式期の集落の一端を知ることのできる遺跡である。

八ケ岳南麓地域一帯は、古くから縄文時代中期の遺跡の豊庫として著名である。しかし、釜無川右岸地域における該期の遺跡については発掘調査された例はなく、右岸における該期の集落の様相は不明瞭であった。こうした中で、根古屋遺跡が発掘調査されたことは、釜無川右岸における集落様相を解明していく上での貴重な資料となろう。

（註１）中山砦発掘調査団「中山砦」山梨県北巨摩郡武川村中山砦発掘調査報告書武川村誌編纂室1984
（註２）末木健他「柳坪遺跡A地区・柳坪遺跡B地区・頭無遺跡」山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内―山梨県教育委員会1975
（註３）末木健他「中原遺跡・上平出遺跡」山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡小淵沢町地内―山梨県教育委員会1974

Ⅲ　発掘調査の概要

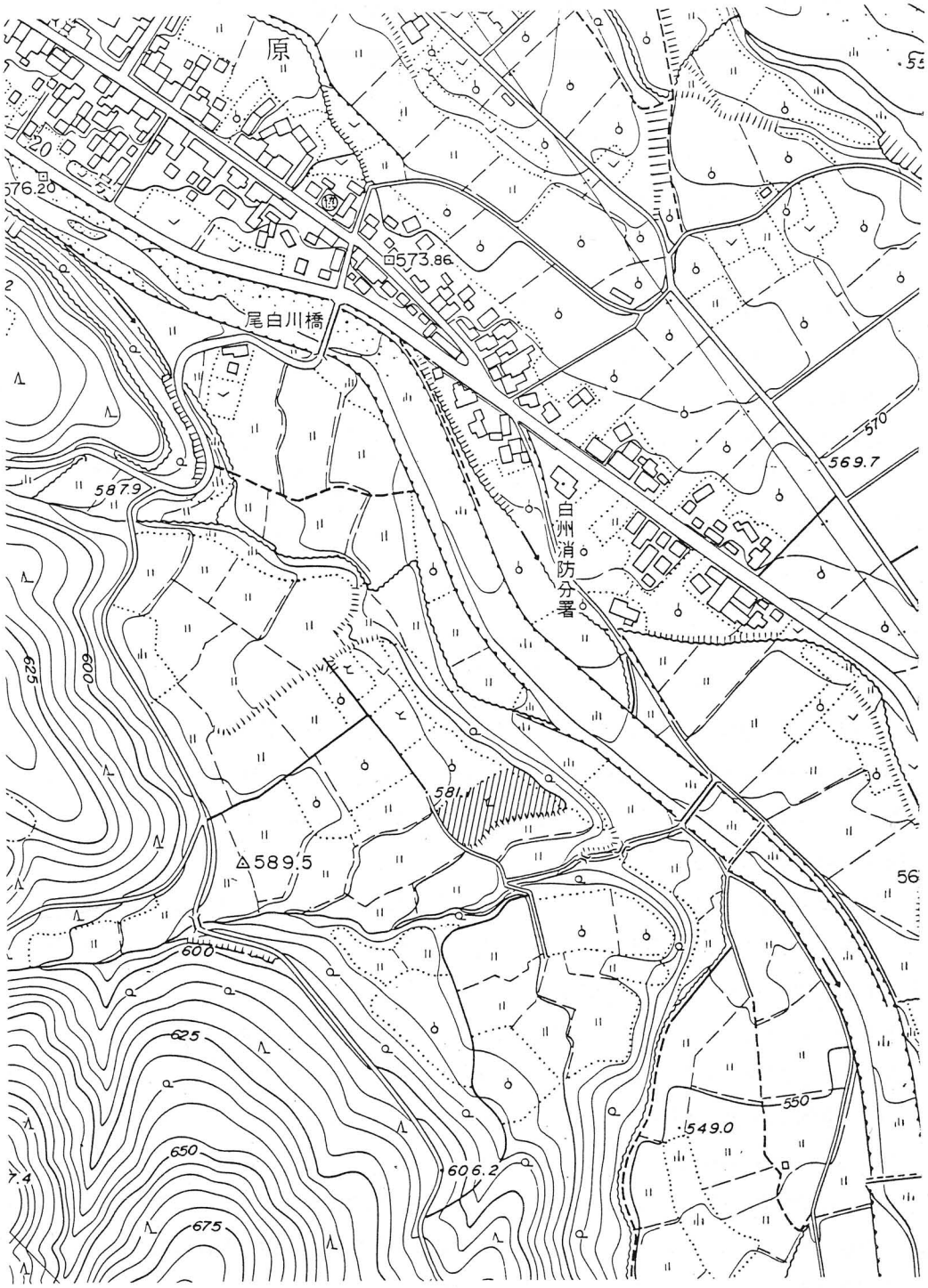
根古屋遺跡は、先の遺跡分布調査の際に確認された遺跡で、その字名である「根古屋」から中世城館跡に関わる遺跡の可能性が示唆されていた。しかし、試掘調査の段階より縄文時代中期に比定される遺物、特に中期後葉曽利式土器の出土量が多く、根古屋遺跡は、縄文時代中期が主体であることが判明した。

今回、調査対象地区となった場所は、先述の如く、尾白川右岸の河岸段丘上の縁辺部にあたり、背後にせまる中山からの土砂流失等により、狭い扇状地状の地形を呈している。その調査対象面積は約3000㎡で、現況は畑地である。

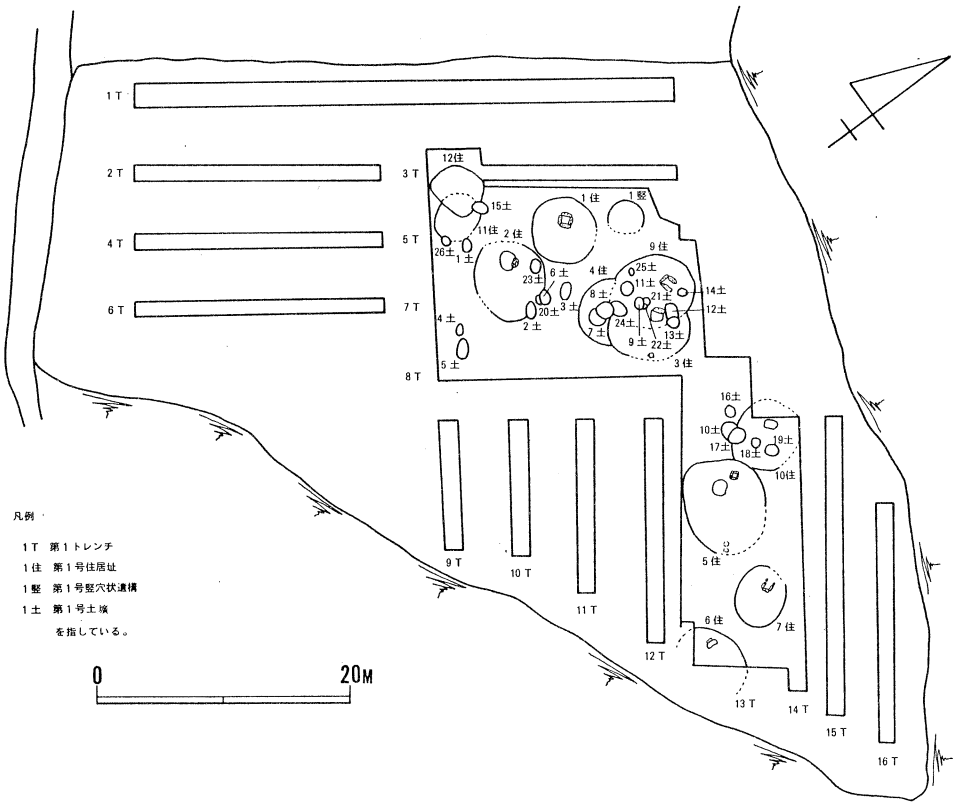
遺跡の基本土層は、耕作土である暗褐色土層（第１層）が厚さ約20～30 cmで堆積し、以下に茶褐色土層（第２層）が厚さ約20～30 cmで堆積している。本層が縄文時代前期～中期にかけての遺物包含層で、遺跡の南東にいくに従い薄くなるのが看取される。以下は二次堆積ロームである黄褐色土層（第３層）が堆積し、所謂地山の層である。いずれの層も砂質で、花崗岩の粒子状のものや小礫等を多量に含んでいる。また、遺跡の南西部では、表土を剥ぐと礫層が露出し、調査は不可能であった。現況が桑畑とブドウ畑であるため、耕作による撹乱が著しく、土層の堆積状態は良好とはいえない。

調査方法は、諸々の事情よりトレンチ方式を採用し、北東～南西方向と北西～南東方向に幅

1.5ｍ、長さ11～43ｍのトレンチを16本（第１トレンチ～第16トレンチ）設定した。掘り下げは全て人力で行ない、遺構の確認の情況に応じてトレンチの拡張を行なった。



第２図　遺跡周辺地形（１／5000）



第３図　根古屋遺跡遺構配置図（１／600）

Ⅳ　縄文時代の遺構

根古屋遺跡から検出された遺構は、竪穴式住居址13軒、土壙26基、竪穴状遺構１基である。竪穴式住居址は、13軒中１軒が前期初頭に属する以外は、全て中期曽利式期に属するものである。住居址の切り込み面は、第２層茶褐色土層中で、床面は第３層黄褐色土層中に構築されている。覆土は、基本土層第２層と同様な色調を呈し、確認段階では困難を極めた。そのため、遺物の集中、拡がりを住居址確認への１つの手掛かりとして確認作業を行なったが、炉石等の露出によって確認されたものも多い。

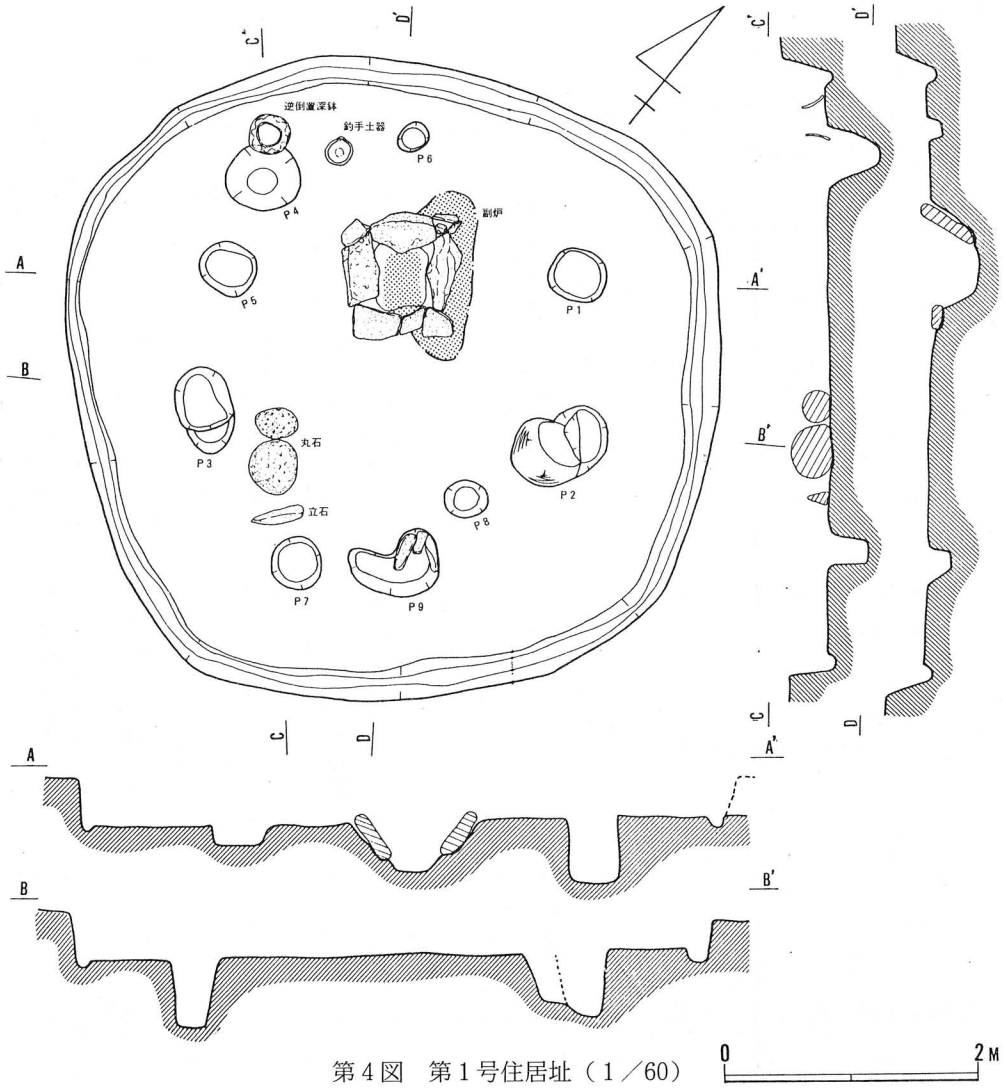
本章では、これら住居址群の中から数軒をピックアップして紹介することにし、土壙については、大方の概略を述べることとする。詳しい記述に関しては、本報告に譲ることにしたい。

（a）　竪穴式住居址

第１号住居址（第４図）

第１号住居址は、第５トレンチ中央部に位置し、南西に第２号住居址、東に第１号竪穴状遺構が存在している。しかし、重複関係はなく単独で存在しており、遺存状態も本遺跡中、最も良好であった。

プランは五角形に近い隅丸方形を呈し、長径5.2ｍ、短径5.1ｍを測る。主軸方位はN—37°—W



第４図　第１号住居址（１／60）

を指す。壁は西壁において高さ約42 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には壁溝が全周し、幅８～16 cm、深さ４～10 cmを測る。床面は若干の凹凸が看取されるものの、ほぼ平坦で全体に堅緻である。ピットは総数９個検出された。Ｐ１～４が覆土の状態、規模、位置等より主柱穴になると思われる。南壁下のＰ９では、棒状の礫が３本並んだ状態で出土しており、入口施設に関連するものなのか否か、その性格については不明である。

炉は本址北側の奥壁にやや寄った所に位置し、長径 100 cm、短径90 cm、深さ40 cmの規模を測る石囲炉である。花崗岩・粘板岩製の板状の大形石７個を用いて構築されている。焼土は、底面上約９cmの厚さで堆積している。また、炉址の北東コーナーには角礫を３個用いて副炉を構築しており、覆土にカーボンの混入が認められるものの、焼土の堆積は認められない。

遺物は本址中央部から多量に出土し、床面上約20 cm前後のレベルに集中している。床面直上出土遺物として、釣手土器、倒置された深鉢形土器、花崗岩製の丸石２個、立石がある。炉址北部から炭化材が床面より数cm浮いた状態で、数箇所より出土している。遺物全体としては欠

損品が多く、土器に関する限り厳密な意味での完形品はない。その出土状態から所謂吹上パターンを呈しているといえよう。

第3号住居址（第5図）

本址は、第7トレンチ及び第8トレンチにまたがって位置している。第4号住居址・第9号住居址と重複しており、その新旧関係は新しい順から第9号→第3号→第4号住居址となっている。重複によりプランの約½が不明となっているが、残存部より推測すると、長径約6.5m、短径約5.7mの規模を測る不整形な長楕円形を呈するものと考えられる。主軸方位はN—44°—Wを指す。

壁は北東壁において高さ22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下に壁溝が部分的に巡っており、幅15～20cm、深さ5cmを測る。床面は平坦で、炉址及び埋甕周辺部は堅緻である。壁周辺部は概して軟弱である。ピットは第3・4・9号住居址より総数61個検出された。その中で本址の主柱穴と考えられるのはP1～5で、各コーナーに位置し、規模も大きく概して深い。

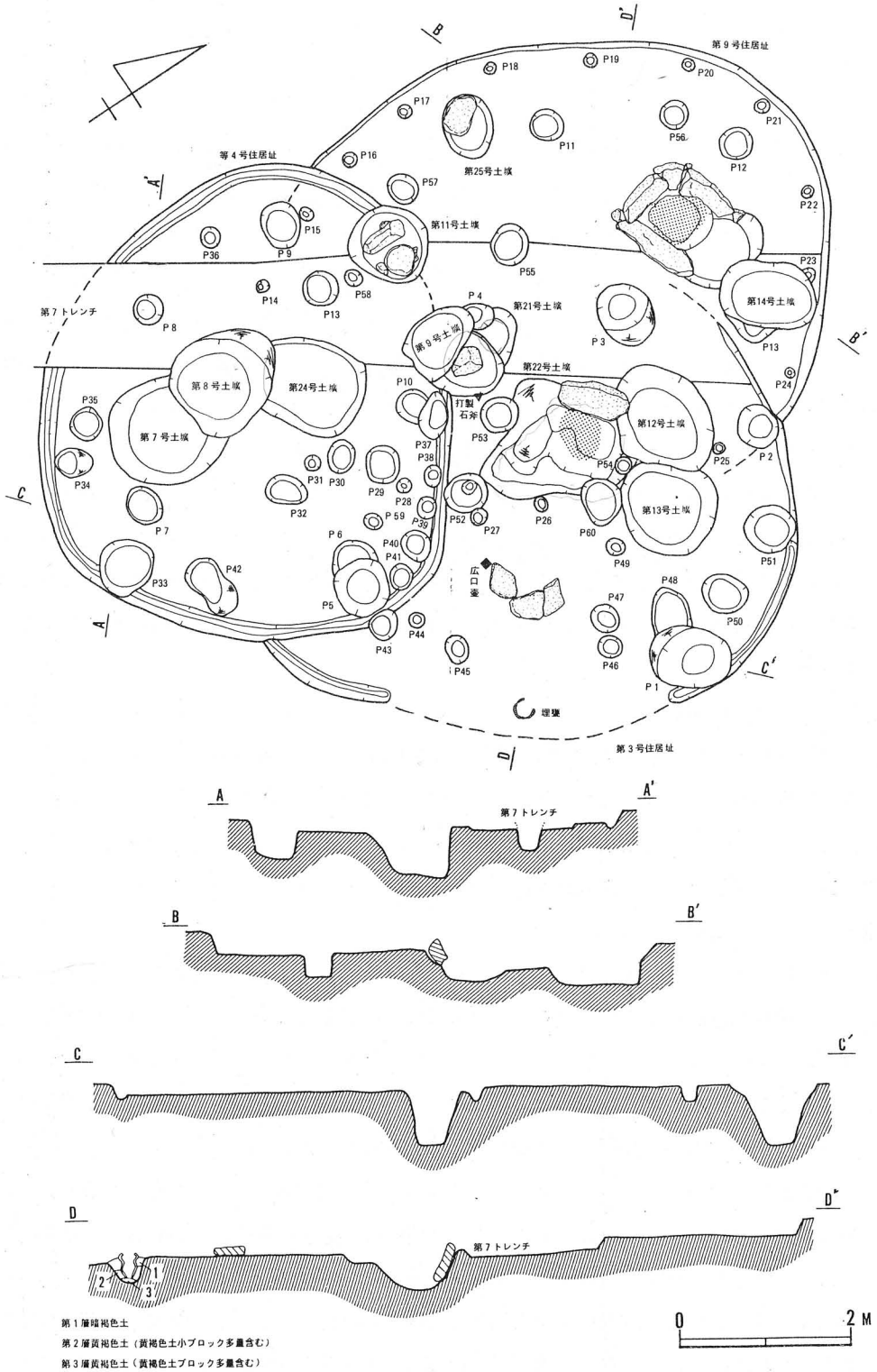
炉は本址の中央部よりやや北に寄った所にあり、長径 170cm、短径 140cm、深さ40cmを測り、方形を呈する石囲炉である。炉石は花崗岩製の大きな板状の石を1個残すのみで、他は抜き去られている。焼土は底面上約10cmの厚さで堆積している。本址南壁下には埋甕が正位に埋設されており、その掘り込みはプランが円形を呈し、深さ25cmを測る。埋甕の口縁部の一部及び底部は失なわれている。

遺物は覆土中より多量に出土しており、床面上約10～20cmのレベルに集中している。床面直上出土遺物としては、埋甕及び口縁部を欠損した広口壷形土器のみであるが、本址中央部寄りの所から花崗岩製の台石状の石が3個出土している。覆土中からは曽利式土器片他、石皿、磨石、打製石斧、石匙等の石器類も数多く出土しており、熱をうけた挙大の礫の出土も目立った。第1号住居址同様、遺物は欠損品が多い。

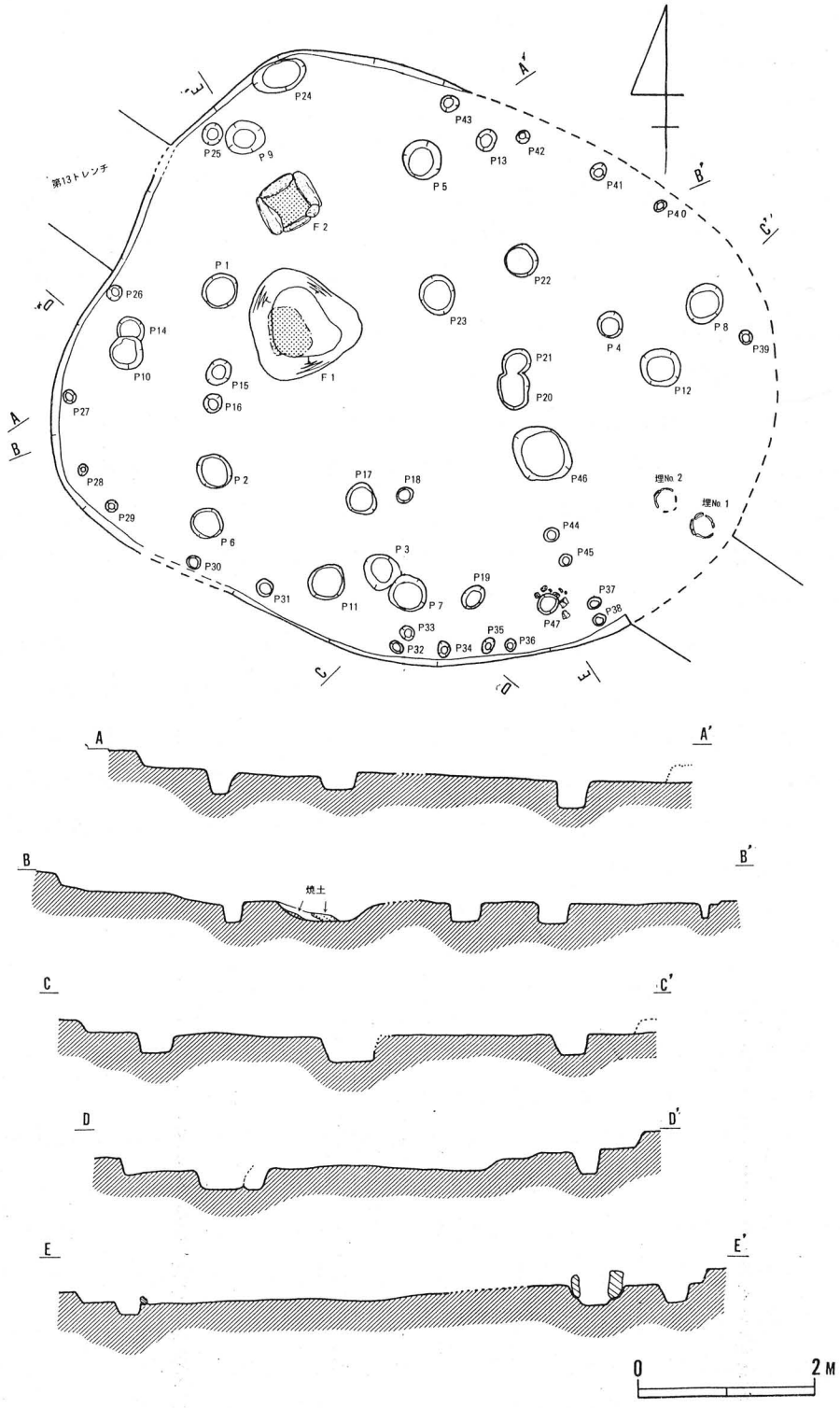
第5号A・B・C住居址（第6・7図）

本址は、第13トレンチ内に位置し、埋甕の露出によって住居址と確認されたものである。桑の根による撹乱は床面まで達しており、その検出は不可能であった。そのため住居構築時の荒掘面から住居址のプラン等の把握に努め、その結果、荒掘面の状態、ピット、炉、埋甕等から少なくとも本址は、3軒の住居址が重複していると判断し、第5号A・B・C住居址と命名した。以下、新しい段階からA・B・Cの順に説明を行なっていく。

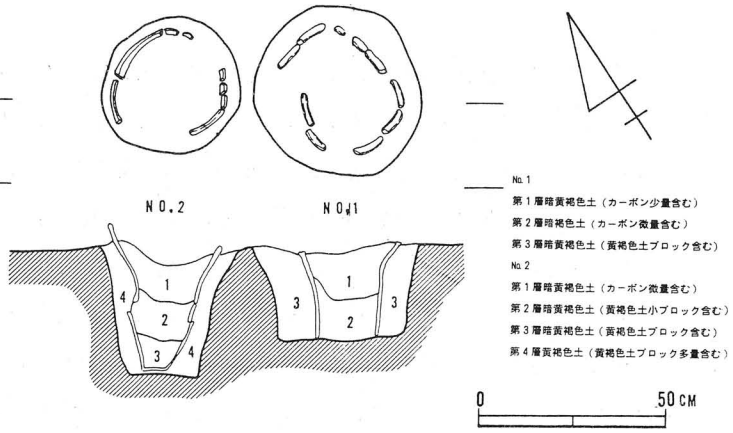
A住居址はP9～13のピットと炉F2からなる住居址で、長径約7m を越える規模の大形住居であったと思われる。プランは推測によると長楕円形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。炉は本址北側にあり、プランが方形を呈する石囲炉である。規模は長径69cm、短径57cm、深さ27cmを測り、焼土の堆積は看取されなかった。花崗岩、粘板岩製の平石5個を用いて構築されている。また、本址に伴うものと考えられるP47の周囲には、挙大の小礫がピットを囲むような状態で検出されており、何らかの性格をもつ施設であろう。



第5図　第3・4・9号住居址（1／80）



第6図　第5号A・B・C住居址（1／80）



第７図　第５号住居址埋甕（１／20）

B住居址はＰ１、５～８のピット、炉Ｆ１、埋甕No.１からなる住居址である。プラン、規模等は不明で、主軸方位はN－63°－Wを指す。荒掘面が北西部付近で１段ガクンと落ちこんでいることから、A住居址より掘り込みが深かったことが認められる。炉Ｆ１は本址北西側にあり掘り込みのみを残しているが、時期的特徴からして本来は石囲等の施設があったと考えられる。プランは楕円形を呈し、長径・短形ともに 120 cm、深さ20 cmを測る。底面中央部及び壁面の一部において焼土が厚さ約８～10 cmで堆積している。埋甕No.１は本址南東隅にあり、その掘り込みは径53 cm、深さ23 cmを測り、プランは円形を呈する。埋甕の口縁部の一部及び胴部下半は欠損している。

C住居址はＰ１～５のピット、炉Ｆ１、埋甕No.２からなる住居址で、プラン、規模等は不明であり、主軸方位はB住居址と同じである。埋甕No.２は埋甕No.１を伴うB住居址の同一主軸上にある。その掘り込みは径36 cm、深さ34 cmを測り、プランは円形を呈する。埋甕は口縁部の一部及び底部の一部を欠損している。この２個の埋甕の存在については、同一主軸上に存在することから判断して、同時存在はなく住居の建て替・拡張によって、ある程度の時間幅をもって存在したと考えた方がよかろう。

なお遺物は曽利Ⅳ～Ⅴ式の一括土器、土器片、磨製石斧、打製石斧、磨石、多凹石、石匙等が出土している。

第12号住居址（第８図）

本址は、第３トレンチ内に位置し、第11号住居址及び第15号土壙と重複している。その新旧関係は新しい順より第15号土壙→第11号住居址→第12号住居址となっている。

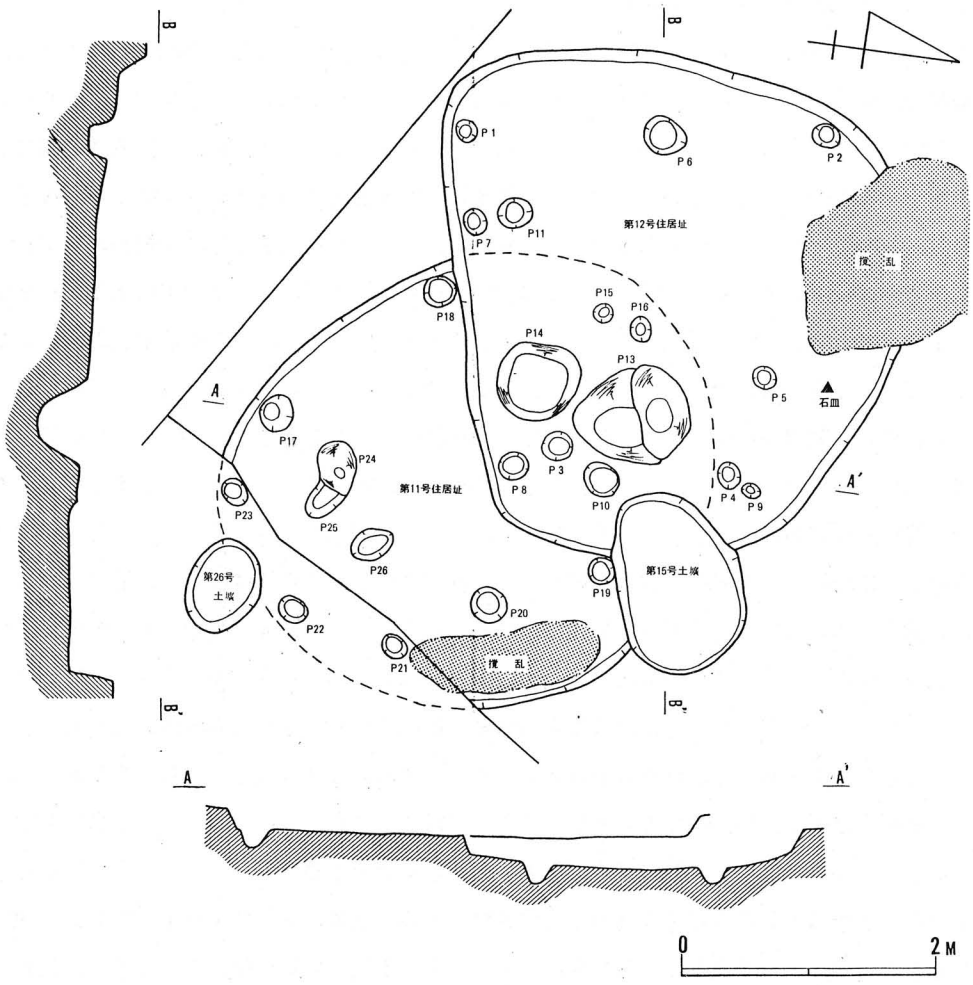
プランは台形状の隅丸長方形を呈し、長径4.0ｍ、短径3.5ｍを測る。主軸方位は不明である。壁は緩やかに立ちがり、高さは西壁において約20 cmを測る。床面は本址中央部に向かって東西両方向から緩やかに傾斜しており、全体に軟弱である。ピットは本址より16個検出され、Ｐ１～４が主柱穴と考えられ、壁際のピットは壁柱穴であろう。炉についてはそれに該当し得るものがなく不明である。

遺物の出土量は少なく、覆土上層部では曽利Ⅳ～Ⅴ式の土器が多く、中～下層部では縄文時代前期初頭に比定される繊維を多量に含んだ土器群が出土している。床面直上出土遺物としては、石皿が伏せられた状態で出土している。

(b) 土　　壙

土壙は、総数26基検出されている。重複関係をもたないで存在するものは少なく、住居址及び土壙同志重複して存在するものが多い。プランは楕円形、長楕円形の２タイプに大別でき、断面はタライ形、オケ形を呈するものが看取される。規模としては、長径が１m 前後のものが多く、深さは20 cm程度のものから１m 近いものがあり、幅をもっている。覆土の状態は、黄褐色土を呈するものが多く、一時に埋め戻された状態を示すものが多いが、自然堆積を示すものも存在しており、その異なった状態より、性格面において相違がみられだろう。

出土遺物は第６号土壙の覆土上層部より、台付鉢形土器の半完形品が出土し、第22号土壙の掘り込み際からホルンフェルス製の打製石斧完形品２点が出土している。また、大形の石を伴うものとしては第11・22・25号土壙が挙げられる。他は土器小片を僅かに出土するのみで、全体としての遺物の量は極めて少ない。



第８図　第11・12号住居址（１／60）

さて、これら土壙の機能と時期の問題であるが、機能としては形態、覆土の状態、遺物の出土状態等から考慮すると、墓又は貯蔵穴の機能が考えられよう。そしてその所属時期については、多くの土壙が住居址を切って構築されていることから、中期末葉又はそれ以降に属するものと考えられる。しかし、一部には住居址に貼られた痕跡を残すものや、中期前葉～後葉にかけての土器片が僅かであるが出土していることも考慮して、ある程度時間幅をもって考えた方がよかろう。

V　縄文時代の遺物

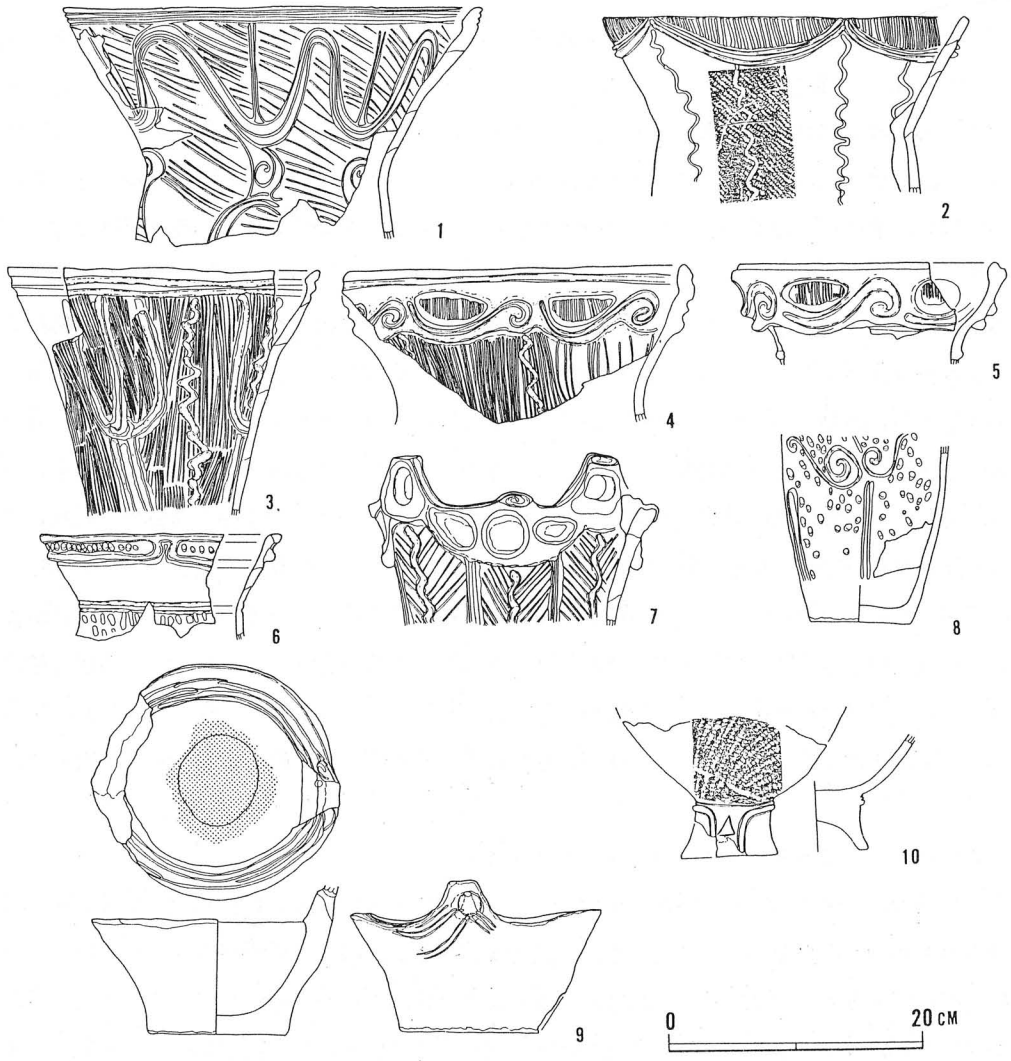
根古屋遺跡からは、縄文時代前期初頭、中期の土器及び石器等が主に出土している。その他土偶も2点遺構外ではあるが出土している。土器は曽利式土器が中心で、深鉢、X把手付甕、広口壷、台付鉢、浅鉢、有孔鍔付土器、釣手土器等の器形がありバラエティーに富んでいる。

(a)　土　　器

第1号住居址出土土器（第9図）

1は床面上に倒置され出土した胴部下半を欠損する深鉢形土器である。胴部上半でくびれ、口縁部は直線的に外反する。口唇部に3条の沈線を巡らし、以下に3～4条を1単位とする沈線を波状に施している。その波底部の内側で口唇部から垂下する平行沈線と、外側で沈線による渦巻文と各々連結している。地文は斜位の条線文である。2は胴部下半を欠損する深鉢形土器で、胴部上半でくびれ、口縁部は直線的に外反する。口縁部には2条の粘土紐を連孤文状に貼付し6単位区画している。区画内に縦位の沈線を施し、その区画下より沈線による蛇行懸垂文が垂下している。地文は斜縄文である。3は胴部下半を欠損する深鉢形土器で、胴部上半で弱くくびれ、口縁部は直線的に外反する。口唇部にやや幅広の2条の沈線を巡らし、胴部に粘土紐貼付による隆帯をU状に施し、その下部より隆帯が垂下している。U状モチーフ内外に沈線による蛇行懸垂文を施し、地文は縦位の条線文である。4はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部に1条の沈線を巡らし、楕円区画文とS字文の組み合せで文様帯を構成している。区画内に縦位の沈線を施し、胴部に沈線による蛇行懸垂文と地文である縦位の条線文を施している。5も4と類似した文様構成を示すが、頸部に沈線により表出させた隆線を横位に巡らし、無文帯を構成している。6は深鉢形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部には粘土紐貼付による隆帯で楕円区画文を施し、区画内に刺突を施す。頸部に2条の沈線を巡らし、無文帯を構成し、その下部にも刺突を施している。7は深鉢形土器の口縁部及び胴部上半にかけての破片である。口縁部上に渦巻文を施した大小2種類の把手が付加され、大きい把手には孔が穿たれてある。さらに楕円区画文を施し口縁部文様帯を構成している。胴部は垂下する隆帯によって区画され、その区画には沈線による蛇行懸垂文と地文である綾杉状の条線文を施している。8は胴部上半以上を欠損する深鉢形土器である。胴部上半に沈線による渦巻文を施し、その下部に同じく沈線で逆U状のモチーフを施している。器面

全体に地文である刺突文を施している。９は床面直上より出土した浅鉢形を基調とする釣手土器である。釣手部は欠損しており、おそらく装飾等はもたないシンプルなアーチ状を呈していたと考えられる。その基部には小孔が穿たれてある。文様は口唇部上に細い沈線を巡らし、小孔付近にも看取される。器面は内外面ともに荒れており、特に内面のスクリーントーンで示した箇所は熱をうけて黒色化している。10は胴部上半を欠損する台付鉢形土器である。脚部と鉢部の接合部に１条の細い沈線を巡らし、脚部には粘土紐貼付による隆帯と沈線により文様帯を構成している。そして細い沈線により三角文を施し、脚部の所々に赤彩の痕跡が看取される。地文は斜縄文である。



第９図　第１号住居址出土土器（１／６）

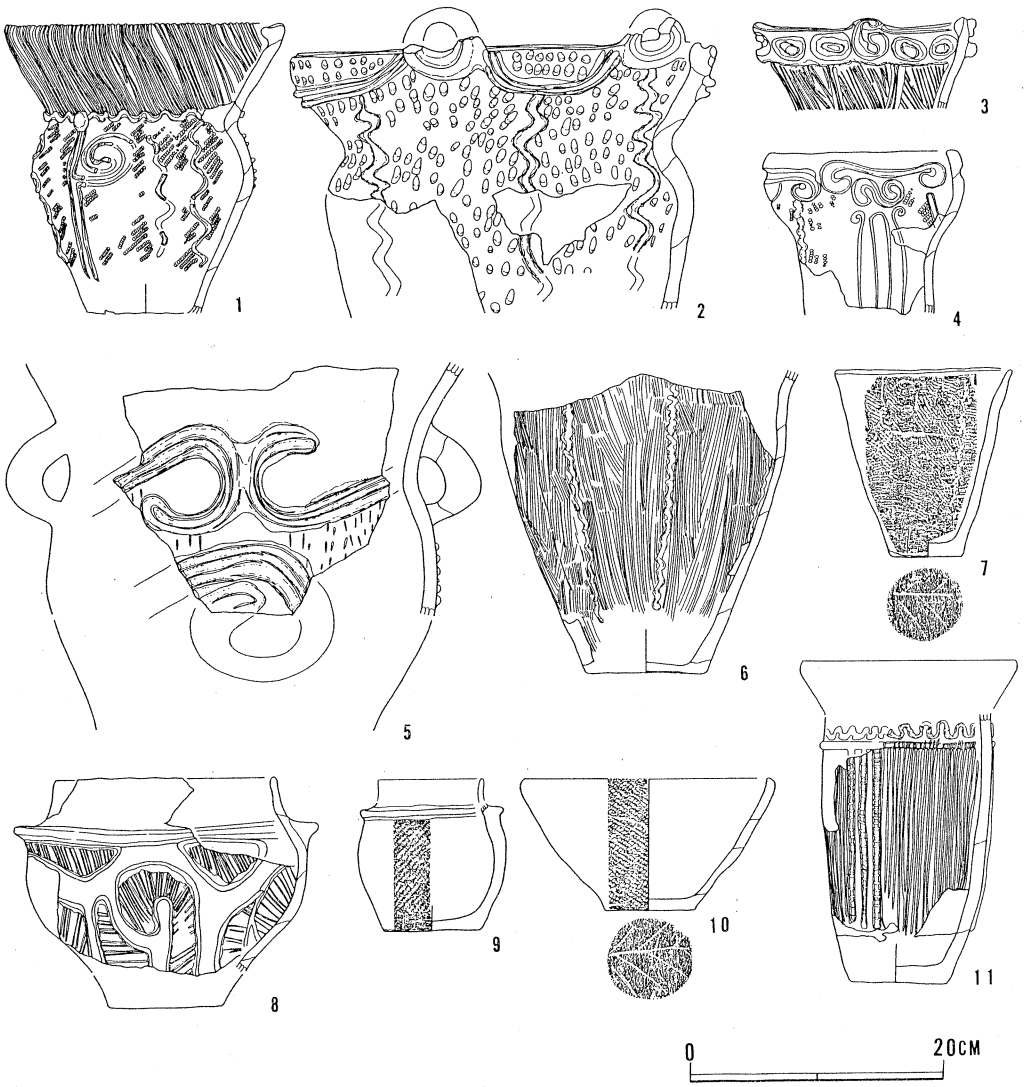
第３・４号住居址出土器（第10図１～10・11）

１は埋甕として使用されていた土器で、口縁部の一部及び底部を欠損する深鉢形土器である。頸部で強くくびれ口縁部が外反し、胴部中位で膨む。口唇部から口縁部全体にかけて斜位の平行沈線文を施し、頸部に１条の波状隆帯とボタン状突起を貼付している。胴部には粘土紐貼付による渦巻文及び蛇行懸垂文を施し、地文は斜縄文である。２は胴部下半を欠損する深鉢形土器である。器形は１と類似し、口縁部に孔を穿った把手を付加し、その間を２条の粘土紐貼付により半月状に区画している。区画内には刺突を施している。胴部には沈線による蛇行懸垂文と地文である刺突文を施している。３は胴部以下を欠損する深鉢形土器である。口縁部上に渦巻文を施した２個の小突起を付加し、沈線による楕円区画文を配して口縁部文様帯を構成している。頸部から隆線が垂下し８単位の区画が構成され、区画内には地文である斜位の条線文を施している。４は胴部下半を欠損する深鉢形土器である。口縁部には沈線による∽状モチーフとS字文を施し、胴部には同じく沈線による？状モチーフと逆U状モチーフ、蛇行懸垂文を施している。地文は斜縄文である。５はX把手付甕形土器の頸部より胴部上半にかけての破片である。胴部には幅広の粘土帯を貼付し、沈線を加え渦巻文を施している。地文は列点文である。６は胴部以下を½の残す深鉢形土器である。胴部に地文である条線文を縦位及び斜位に施し、沈線による蛇行懸垂文を施している。７は口縁部の一部のみを欠損する深鉢形土器である。底部から口縁部まで直線的に外反している。器面全体に斜位の撚糸文を施し、綾絡状の結節縄文による蛇行懸垂文を４単位施している。底部には木葉痕が看取される。８は鍔付広口壷形土器の口縁部から胴部下半にかけての破片である。鍔直下に三角文等を配し、その他沈線によって複雑に区画されており、区画内には平行沈線が施されている。９は本址床面直上より出土した口縁部のみを欠損する鍔付広口壷形土器である。胴部には地文である斜縄文を器面全体に施し、外面は赤褐色・内面は黒褐色を呈する。10は全体の約 3／4 以上を欠損する浅鉢形土器である。口縁部がやや緩やかに内湾し、器面には地文である斜縄文を施している。底部には木葉痕が看取される。11は口縁部及び頸部の一部を欠損する深鉢形土器である。頸部には１条の粘土紐貼付による波状隆帯と刻み目を施す隆帯を横位にめぐらし、その直下から３条１組、２条１組の刻み目を施した懸垂文を２単位づつ垂下させている。その間には縦位の平行沈線文を施している。

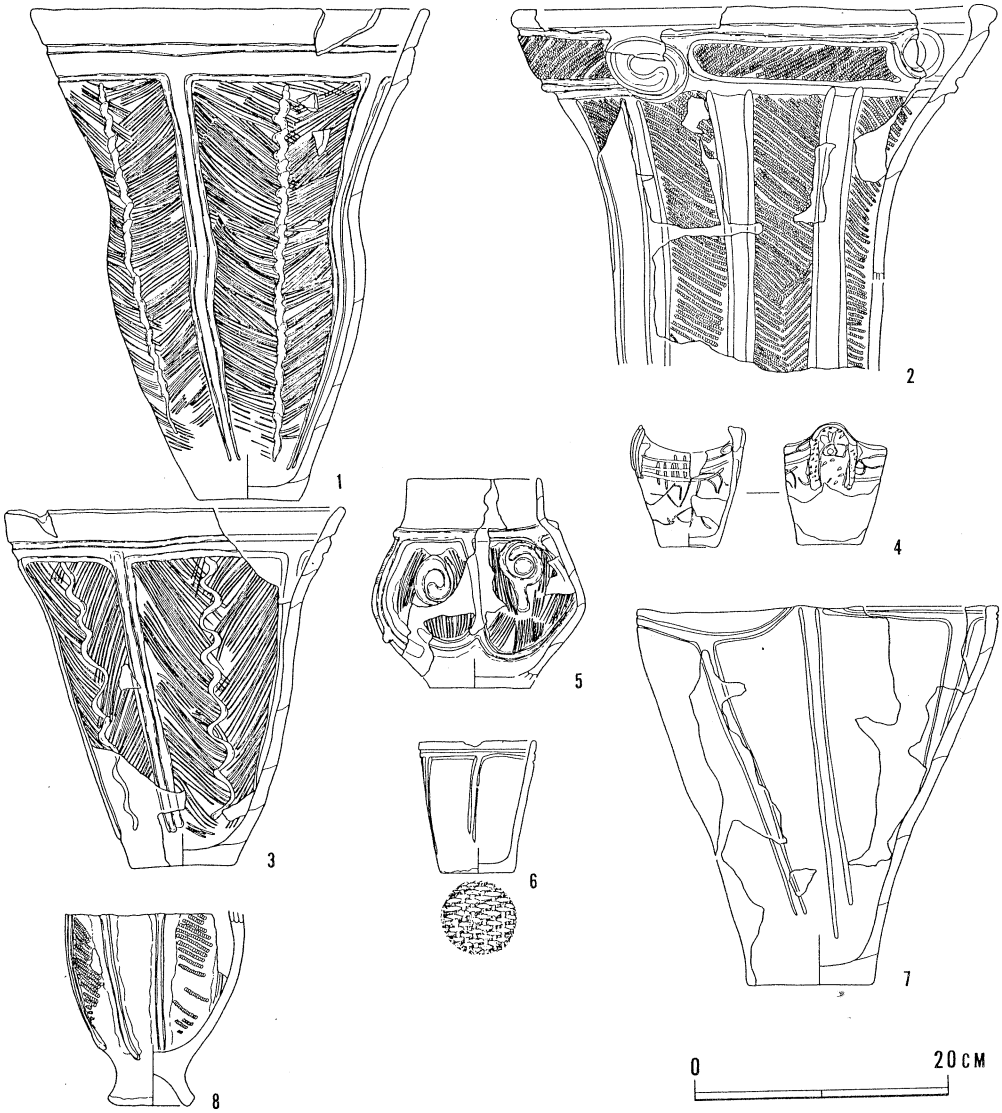
第５号A・B・C住居址出土土器（第11図１～４）

１はC住居址埋甕№２として使用されていた土器で、口縁部及び底部の一部を欠損する深鉢形土器である。口縁部がやや外反しながら大きく開き、胴部のくびれ及び膨みは小さい。文様は口唇部に１条の沈線を巡らし、胴部に沈線による⊓区画文を６単位配している。区画内には沈線による蛇行懸垂文と地文である綾杉状条線文を施している。２はB住居址№１埋甕として使用されていた土器で、口縁部の一部及び胴部下半を欠損する深鉢形土器である。口縁部が緩やかに内湾し、頸部で僅かにくびれる。文様は口縁部に隆帯と沈線によって表出された円文と

渦巻文を交互に配し、その間には楕円区画文を施している。胴部には沈線によって区画された無文帯が11単位垂下している。地文に斜縄文を施し、口縁部と胴部とでは回転方向を異にしている。また胴部の一箇所では羽状に施文されている。3は口縁部の一部及び底部付近を欠損する深鉢形土器である。文様構成は1と同様であるが、1と比べて胴部の膨みがほとんどない。4は口縁部の一部及び胴部の一部を欠損する小形深鉢形土器である。口縁部は緩やかに内湾し波状を呈している。2個の小孔が穿たれており、そのまわりに粘土紐を逆U状に貼付し刺突文を加えている。口唇部及び胴部に縦位・横位の沈線文を施している。また細い沈線により何らかを線刻したような痕跡が看取されるが、鳥? であろうか。検討の余地を残すところである。器面の内外には赤彩の痕跡が看取される。



第10図　第3号住居址（1～10）・第4号住居址（11）出土土器（1／6）



第11図　第５号住居址（１～４）・第６号住居址（５）第11号住居址（６～７）
第６号土壙（８）出土土器（１／６）

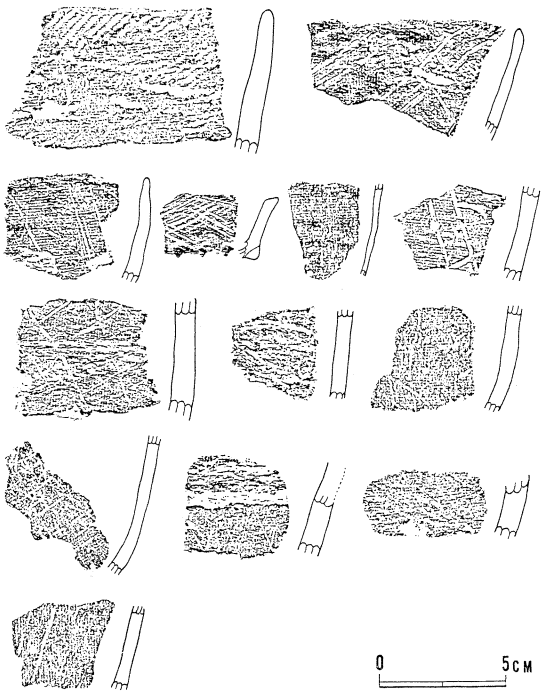
第６号・11号住居址及び第６号土壙出土土器（第11図５・６～７・８）

５は全体の約 2／3 を残す広口壷形土器である。口縁部はほぼ直立し胴部中位で大きく膨み底部へと結んでいる。頸部には１条の粘土紐を鍔状に貼付し、胴部にはU状の区画を５単位配している。区画内には粘土紐貼付による渦巻文及び地文である条線文を斜位・縦位に施している。６は本址床面直上より出土した口縁部の一部のみを欠損する小形深鉢形土器である。底部から口縁部まで直線的に外反する。口唇部に１条の沈線を巡らし、胴部には沈線による⊓区画文を７単位配している。底部には網代痕が看取される。７は全体の約 2／3 を残す深鉢形土器である。口縁部はやや緩やかに内湾し、胴部下半が弱くくびれている。文様構成は６と酷似しており、⊓区画文は８単位となっている。８は全体の約½を欠損する台付鉢形土器である。胴部には粘土紐貼付による懸垂文を垂下させ、８単位の区画を施している。一区画おきごとに斜

縄文を施し、回転方向は同一である。

縄文時代前期初頭土器群（第12図）

縄文時代前期初頭土器群は、中期曽利式土器群に比べてネガティブな出土状態を示している。一括資料は得られず、該期の住居址に属する第12号住居址においても細片のみの出土であった。第12図の拓影図は第12号住居址及び、その他の遺構、遺構外出土のもので紙面の都合上、他の資料については今回、割愛させていただいた。



第12図　縄文時代前期初頭土器片拓影（1／3）

大半の土器片胎土中には、多量の繊維を含み、色調は明褐色及び褐色を呈し、焼成も良好である。器面に縄文を施すもの、竹管状工具による格子目文、斜線文等を施すものが看取される。また、指頭圧痕を残す薄手土器、所謂オセンベ土器も出土している。これらの大半は木島式に比定されるもので、北巨摩郡下でも近年その出土がみられるようになってきた。今後の資料増加が期待される。

（b）石　　器（図版7～8参照）

打製石斧、磨製石斧、石鏃、磨石、凹石、石皿、多凹石、石匙等が出土している。この中においては、再生産道具である磨石がポジティブな出土状態を示している。

打製石斧は欠損品が多く完形品は少ない。石質は結晶片岩、凝灰岩、硬砂岩、ホルンフェルス等が看取される。磨製石斧は4点出土している。内1点が完形品である。石質は輝緑凝灰岩、珪質板岩である。石鏃は7点出土しおり、石質は全て黒曜岩である。磨石及び凹石は挙大の大きさのものが中心である。石質は花崗岩、輝緑岩、硬砂岩等である。凹石は両面に凹を有するもの、片面のみに有するものがあり、後者の場合、凹を有さない面を磨石として使用した痕跡が看取される。石皿は欠損品が多い。完形品は第12号住居址床面直上より出土したもののみである。石質は輝質安山岩である。多凹石は3点出土している。石質はいずれも輝質安山岩で、石皿を利用したものと石の全面を利用したものがあり、凹は逆円錐形を呈している。石匙は2点のみ出土しており、いずれも横型のもので石質は凝灰岩及び頁岩である。内1点は刃部の使用痕の観察から、かなり固い物質を削ったと思われる痕跡が看取される。

VI　ま　と　め

根古屋遺跡は、縄文時代中期曽利式期の住居址群を中心とした集落址の一部である。今回の調査で検出された曽利式期の住居址は計12軒で、曽利Ⅰ～Ⅴ式全般に亘っている。住居址群は、狭い土地を有効に利用するかの如く、多数の切り合い関係を持ちながら構築されている。

このような状況下において、第1号住居址は、第2号住居址とかなり接近しているが直接的な重複はなく、他の遺構とも重複はみられず、遺存状態も良好であった。出土遺物も他の住居址とは様相を異にしている。床面直上出土の釣手土器、倒置された深鉢形土器、丸石、立石。これらの遺物から、祭祀的な性格を帯びた住居であることは否定できない。丸石は人頭大より僅かに大きいもので、立石と並んで2個置かれてあった。この丸石の性格について武藤雄六氏は「種子神様」と想定しているが(註1)、その是非はともかく、祭祀的性格の強い住居からの出土例が多いことから、今後、祭祀の中の丸石の在り方について検討してゆかねばなるまい。また、倒置された深鉢形土器の文様構成についても若干の問題が残る。器形は曽利式の系統を引くが、その文様構成は、所謂唐草文系土器の要素が強いのではなかろうか。

遺跡全体に目を向けると、如何せん未掘部が多く、集落の規模、形態等は不明瞭な点が多い。住居址の平面形態は不整円形、楕円形等を基調としているが、各小時期ごとには大した相違は認められない。住居址の掘り込みは、時期が進むにつれて浅くなる傾向がみられる。

炉は、大半が石囲炉であるが、完存するものは第1号住居址及び第5号A住居址のみで、あとは炉石が抜き去られている。本遺跡では大形の石を使用し、炉自体も大形化している。

埋甕は、第3号住居址、第5号B・C住居址に存在するのみで、普遍的な存在ではない。長坂町頭無遺跡では、重複住居が少なく、埋甕の存在は多い。本遺跡とは異なった様相を示している。また、第5号B住居址の埋甕として使用された土器は加曽利E系土器であり、その存在の意味、曽利式土器との共伴関係を捉える上での良好な資料といえるだろう。

土壙群は、住居址と重複して検出されている例が多い。つまり居住区との境界が明確でないことがいえる。釈迦堂遺跡群三口神平地区においても、曽利式期の土壙群は、住居址群と重なり合った状態で検出されているという(註2)。

以上、根古屋遺跡について気づいた点を幾つか簡単に挙げてみた。山梨県内では、曽利式期の集落址全体をカバーした調査は未だなされていないといえる。そのため集落研究の基礎である居住域と墓域、生業の場との関係を統一的に捉えられていないのが現状であろう。このような問題をも含めて、集落間の相互関係、テリトリーの問題を今後どのように関連させ追及していくか大きな課題である。

（註1）　武藤雄六他「座談会丸石神と考古学」どるめん28、1981
（註2）　小野正文「山梨県における縄文早期と中期の集落」日本考古学協会昭和59年度大会大会資料、1984

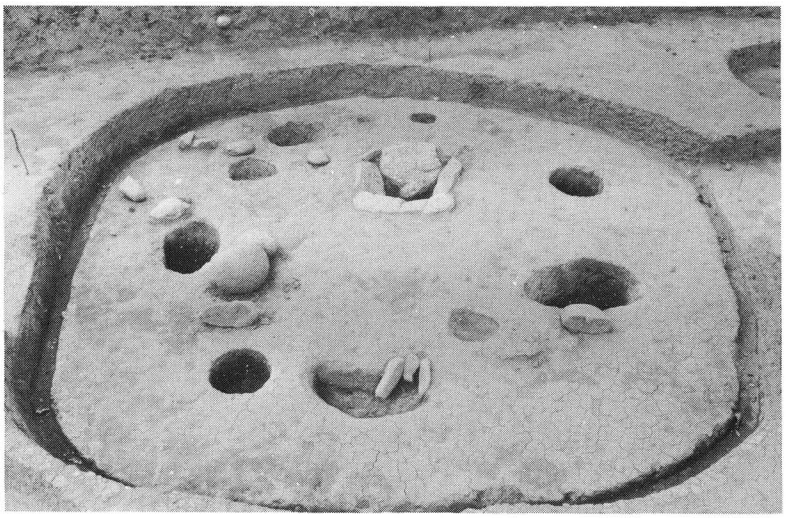
住居址番号	規模(m)	プラン	主軸方位	壁(cm)	壁溝	炉	住穴	床	備考
第1号住居址	5.2×5.1	隅丸方形	N—37°—W	約30～40	あり	石囲炉	9	良好	床面上より倒置深鉢形土器、釣手土器、丸石、立石出土。副炉あり
第2号住居址	6.75×5.85	長楕円形	不明	約20	なし	石囲炉	25	やや軟弱	副炉あり
第3号住居址	推6.5×5.7	長楕円形	N—44°—W	約22	あり	石囲炉	—	やや良好	埋甕1　4住・9住と重複 柱穴は3・4・9住あわせて計61
第4号住居址	5.5×4.9	長楕円形	不明	約10	あり	不明	—	軟弱	3住・9住と重複
第5号A住居址	推7.5×6.5	長楕円形	不明	不明	なし	石囲炉	—	不明	10住と重複　柱穴は5号A・B・Cあわせて計47
第5号B住居址	不明	不明	N—63°—W	不明	不明	石囲炉？	—	不明	埋甕　1
第5号C住居址	不明	不明	N—63°—W	不明	不明	石囲炉？	—	不明	埋甕　1
第6号住居址	不明	不明	不明	約20	不明	石囲炉	1	軟弱	半分以上未調査
第7号住居址	4.5×3.95	長楕円形	不明	不明	不明	石囲炉	13	不明	炉は石囲埋甕炉の可能性ありり
第9号住居址	推6.6×6.0	楕円形	不明	約15	なし	石囲炉	—	軟弱	3住・4住と重複 床面上より打製石斧出土
第10号住居址	推5.2×4.8	楕円形	不明	不明	不明	石囲炉？	6	不明	5住と重複
第11号住居址	推3.9×3.5	不整円形	不明	約10	なし	不明	14	やや軟弱	12住と重複
第12号住居址	4.0×3.5	隅丸長方形	不明	約15～20	なし	不明	12	軟弱	11住と重複 床面上より石皿出土

附表1　竪穴式住居址一覧表（8号住居址は欠番）

図　　版

図版1

1. 遺跡調査前全景

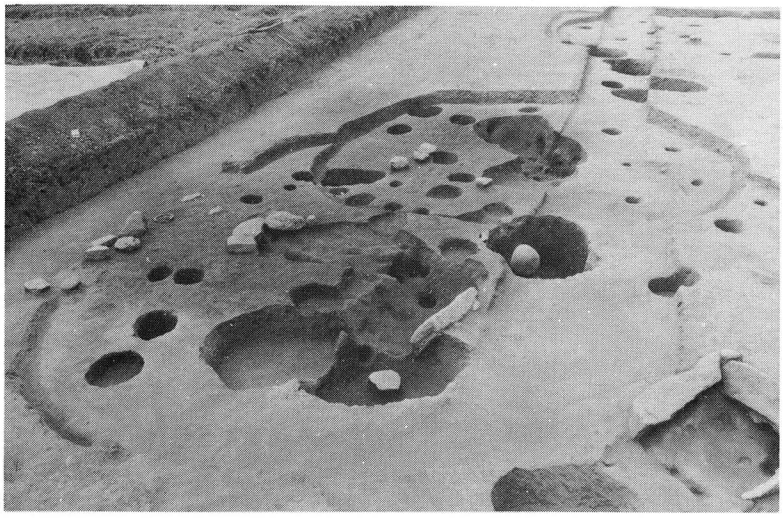


2. 第1号住居址

3. 第1号住居址炉址周辺部

図版2

1. 第1号住居址
丸石出土状態

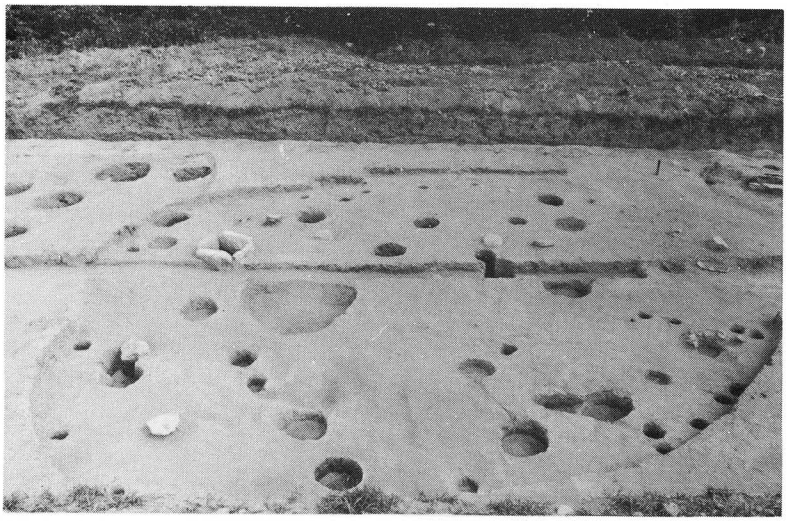


2. 第3号住居址

3. 第3号住居址
遺物出土状態

図版3

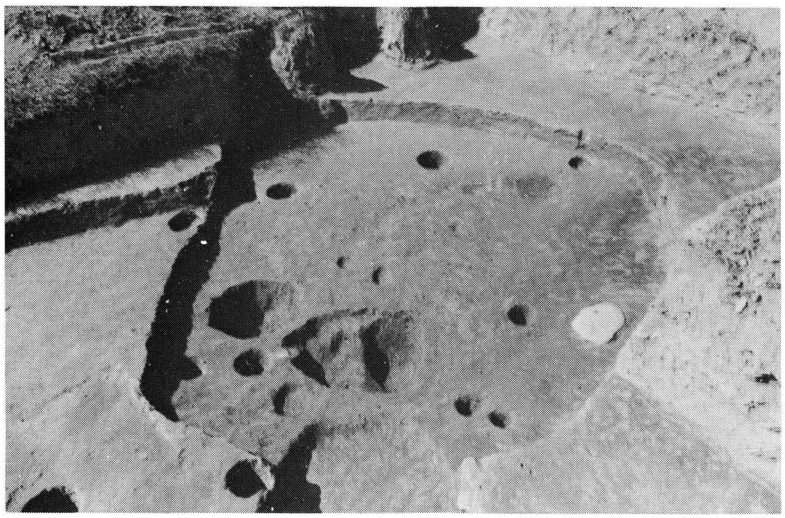
1. 第3号住居址埋甕埋設状態



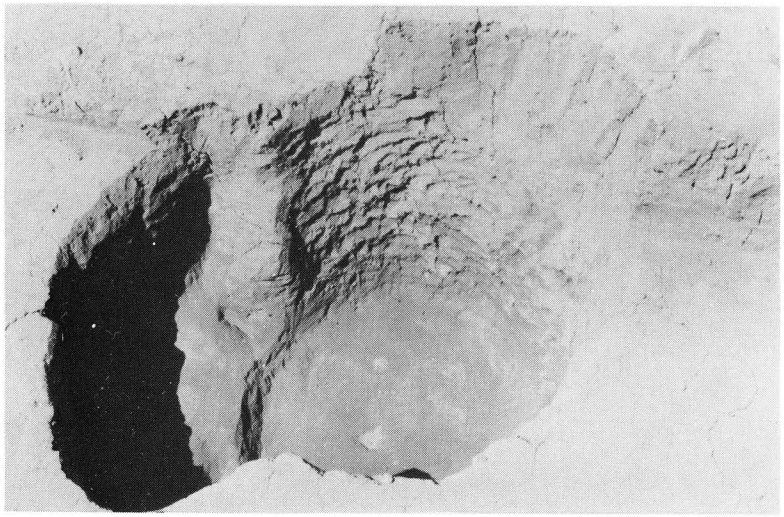
2. 第5号A・B・C住居址

3. 第5号B・C住居址埋甕埋設状態

図版4

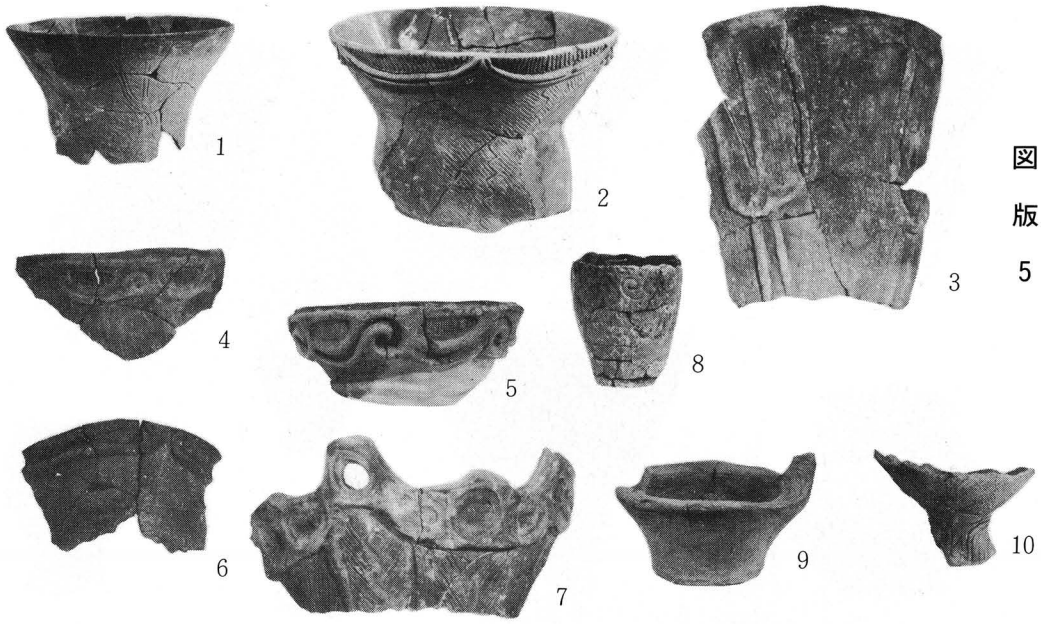


1. 第12号住居址

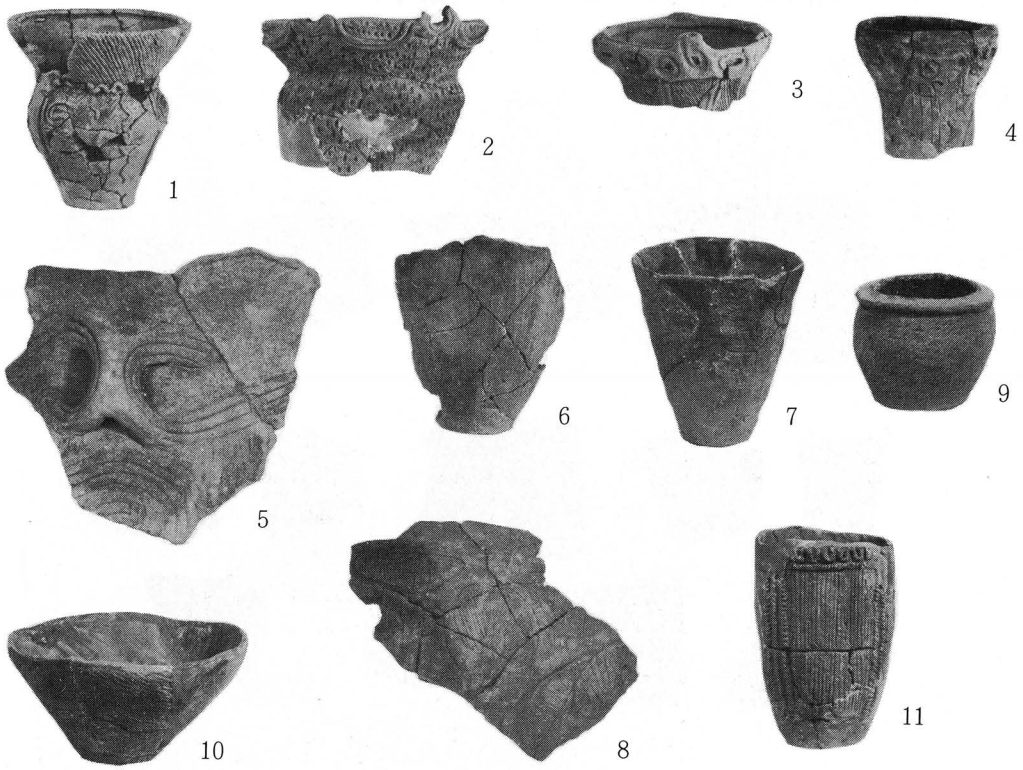


2. 第6号土壙

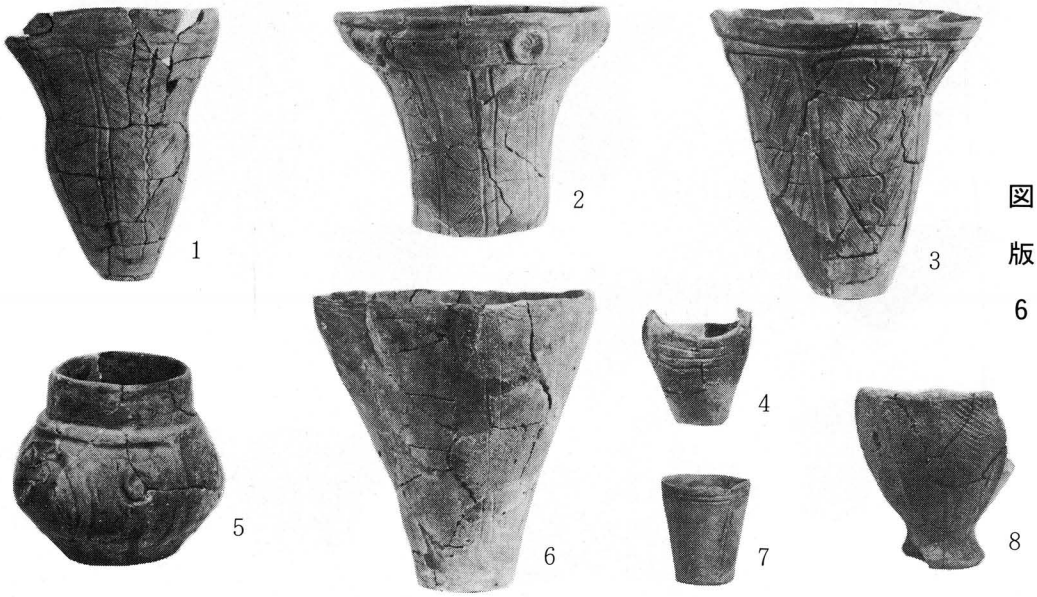
3. 第6号土壙
土器出土状態



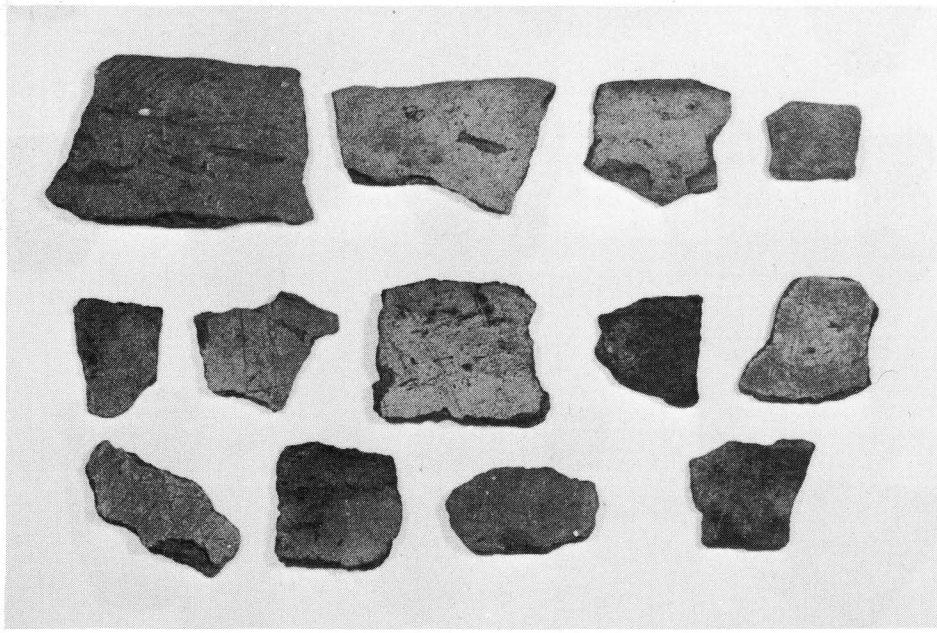
1. 第1号住居址出土土器



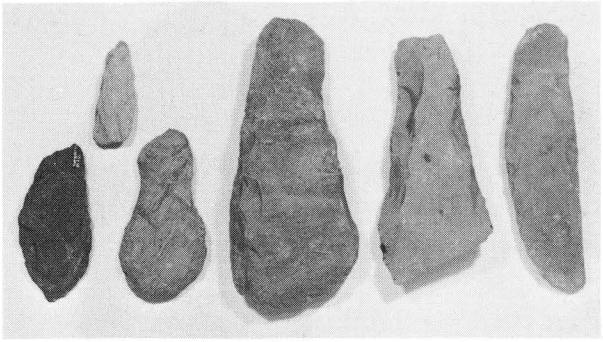
2. 第3号住居址出土土器



1. 第5号A・B・C住居址（1～4）、第6号住居址（5）、第11号住居址（6・7）、第6号土壙（8）出土土器

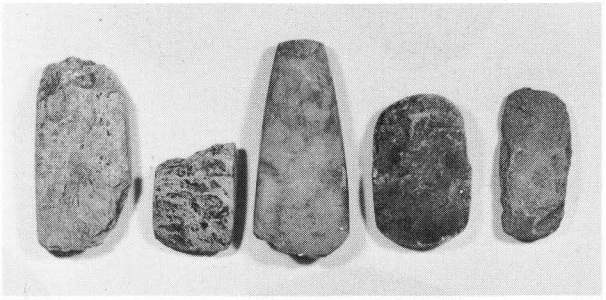


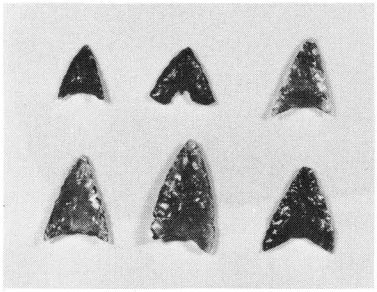
2. 縄文前期初頭土器群



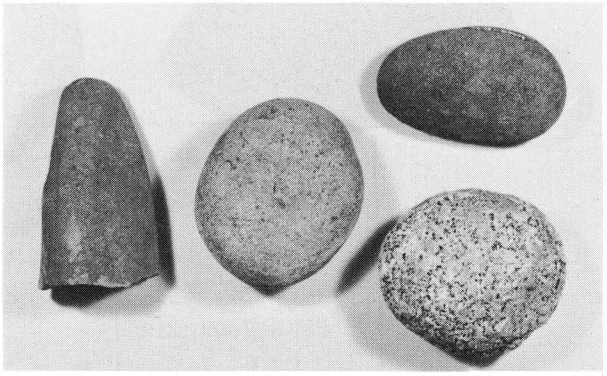
1. 打製石斧

2. 磨製石斧

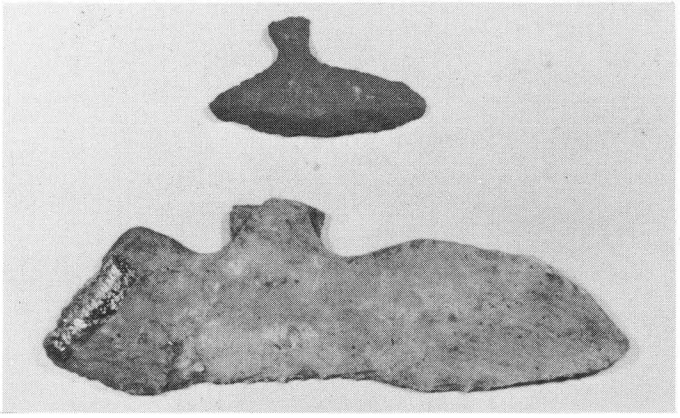




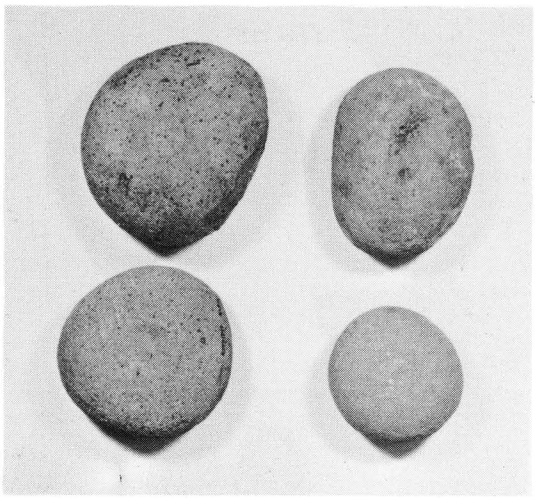
3. 石　鏃



4. 磨　石

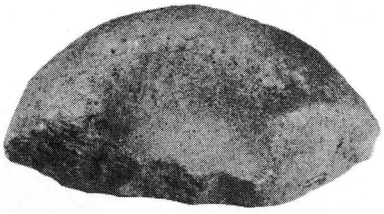


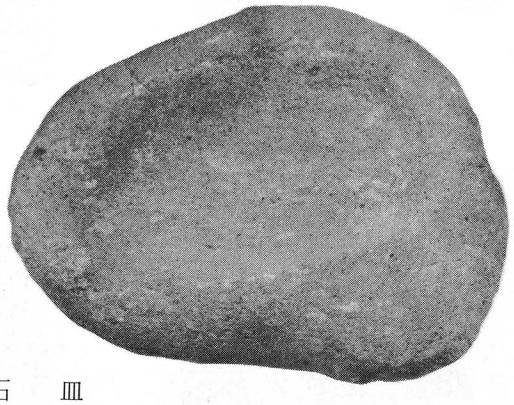
5. 石　匙



1. 凹　石

2. 多凹石





3. 石　皿

4. 発掘調査参加者

根古屋遺跡発掘調査概報

昭和60年3月25日印刷
昭和60年3月31日発行
編集・発行　白州町教育委員会
山梨県北巨摩郡白州町白須 312
電話 0551— 35 —2121
印刷　峡北印刷株式会社
山梨県北巨摩郡長坂町長坂2313
電話 0551— 32 —3245